

---

# ブリーディング=マシン

初瀬さかづき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ブリーディングマシン

### 【Nコード】

N2379C

### 【作者名】

初瀬さかづき

### 【あらすじ】

いつも通り、いつも通り、いつも通り。それが突然崩壊した。未知の者たちから、人類は征服される。抵抗することは許されず、主人公・坂下亜紀は逃げまどう。しかしやがて彼女は、自分がなぜか個人として追われていることに気づく。絶対に逃げられないものから追いつめられる、一人の女子高生のストーリー！。

### 1・3 時限目、古典の時間に

その日、いつものように太陽が昇り、人々の生活の上に朝がやってきた。

坂下亜紀はもそもそと布団の中で動く。ベッドの脇にある目覚まし時計を見ると、起きるのにちょうど良い時間だった。

布団から出ると、10月の冷えだした朝の空気が、裸足の足にまとつく。

洗面所に行つて、鏡を見る。肩より長めの真っ直ぐの黒髪、少し日焼けの残った肌、切れ長の目とつんとした鼻、その下には薄めの唇。そこには見慣れた自分の顔が、いかにも寝起きという様子で映っている。

顔を簡単に洗つて、寒さに少し躊躇しながらパジャマを脱ぎ、いつも通りの手順でセーラー服を着た。

通学用の鞆を持って、階下に降りるとキッチンに母がたっていた。

「おはよう」

母親と重なるように挨拶を交わすと、亜紀はテーブルについてすでに準備されていた朝食のトーストをかじりだす。

「亜紀、この三者面談のプリントの提出日、今日でしょ。書いといだから、ちゃんと持って行きなさい。」

母親はそう言つて、薄汚れたような色をした紙を亜紀に差し出した。

「分かった。」

軽くうなずいて、紙を受け取る。

本当に、何気ない、いつも通りの朝だった。

朝食を食べ終えて、身支度をしてばたばたと玄関に向かう。余裕のある時間に起きてても、なぜかいつも最後はばたばたになってしまう。「今日も部活で遅いんですよ。」

急いで靴を履いていると、後ろから母親の声がした。

「うん」

亜紀は剣道部に入っている。

「お母さんも今日、仕事遅いから、ご飯冷蔵庫に入れとくわね。」

「分かった、ありがとう。行ってきます！」

言い終わらないうちに、亜紀は駆け出すように玄関から出て行った。

亜紀の通う高校は、自宅から歩いていける距離にある共学の公立高校だ。学校が近づくにつれて、同じ制服の集団がうようよと増えだし、まるで集団登校のような状況になっている。

「亜紀、おはよう」

後ろから亜紀に追いついた友達が、ポンと肩をたたいた。学校での一番の仲良しの高原紗智子だった。

「おはよう」

「ねえ、リーディングの予習した？」

「途中くらいまで」

「あたし、全然やってない。亜紀見せて」

「オッケー、その代わり、数学写させて」

そんなたわいないことを話しながら、いつの間にか学校に着き、いつも通り授業が始まり、亜紀は昨日と同じように黒板と窓の外をかわりばんこに眺めていた。

そのままいけば、いつも通り授業が終わったり始まったりを繰り返して、紗智子とお昼ご飯を食べ、掃除をして部活に行き、家に帰って、冷蔵庫に入っているご飯を温め、テレビを見ながら一人で食べて、食べ終わった頃に母親が帰ってきて、と続くはずだった。

その「いつも通り」が崩れ始めたのは、3時限目の古典の授業の時

だった。

窓の外には、全体的に薄い色調の家並みの風景が広がっている。その景色を覆うように、薄い青の空が爽やかに広がり、家並みの所々に緑色が浮かんで、風景をより和やかに飾っていた。

亜紀は見るともなくその綺麗な、見慣れた景色を見ていた。

・もうそろそろ、席替えかな

と、突然、それまでぼんやりと耳に届いていた先生ののんびりした声が変わって、耳障りな機械音が響きだした。

亜紀は、顔を上げた。

見ると教室の左端にある棚の上に置かれたテレビに、白黒の縞模様がザーザーと音を立てて流れていた。先生も生徒たちも、不思議そうにそちらを見ている。教室がざわざわし出した。

「壊れたかな、どうしたんだろう」

中年の男の先生は、のんきそうにそう呟いてテレビに近づいた。

隣のクラスからもざわめきが聞こえ出す。まさか隣でもテレビが壊れたのだろうか。

「我々は」

突然、機械音の上から、かぶせるように男の声がした。

間近でテレビを覗いていた先生は、ビクツとして一歩さがる。声が続く。

「人類の子孫であり、新世界暦1651年から来た者です。」

ざわめきが、意味不明というように大きくなる。笑い出した者もいた。隣の教室から出てきた若い女の教師が、廊下をばたばたと駆け

て行った。

亜紀は視線をそらさず、というよりそらせずに、テレビを見つめる。テレビからの声は淀みなく続く。

「今、日本の通信システムを操作し、この音声を日本中に同時発信しています。」

この時初めて、亜紀は事態に異様さを感じた。何か、おかしい事になっている。

「本日、日本政府と我々の交渉は決裂しました。よって我々は当初の方針を変更し、我々の祖先であるあなた方を征服することにした。無益な抵抗はやめてください。あくまでも抵抗する者を、我々は力によって制圧します。我々への抵抗は死を意味すると言ったことを、肝に銘じておいてください。」

男の声が一気にそこまで続くと、今度は機械音がいつそう大きくなった。

教室は緊張した空気というよりは、事態が掴めずにとまどった雰囲気だった。

「意味分かんねえ」

「先生、何これ、新手の避難訓練？」

冗談めいた声と、心配そうな呟きが飛び交っている。先生は何も答えずに教室を出て行った。職員室に行くのだろうか。

「我々のメッセージを信頼していただくために、今から映像を流します。」

先生が去ったとたん、男の声がまたし出した。

そして白黒模様だったテレビに、カラーの映像が光った。

亜紀は机から身を乗り出すようにテレビを見つめる。教室はシンとして、皆が映像に目を向け始める。外国だった。

どこの国かは分からない。画面は鮮明で、音も綺麗に聞こえた。誰かが叫んでいる。たくさんの人がばらばらと走っていて、黒っぽい衣装にヘルメットというおそろいの衣装の集団がその後を走っている。

追いかけているのだ。

あつというまに何人かが捕まる。捕まって振り切ろうとした一人の人が、頭を何かで殴られて倒れ込んだ。

ふと周りを見ると、倒れている人のような形がたくさんあった。

爆音のような音が響く。ヘリコプターのような音がした。

映像が切り替わる。

切り替わった映像の、奥の隅に映った物を見て、亜紀は固まった。

自由の女神像が、凜と立っていた。

「アメリカ」、と誰かが呟いた。

教室中が凍りつく。

映像が止まった。テレビには濁り混ざった奇怪な白黒が再び流れだし、雨のような機械音が沈黙した教室に響いた。

「ご覧のように、抵抗すれば悲惨な状況になります。我々は日本が、アメリカ合衆国のような行動に出ないことを望みます。我々に降伏し、指示に従ってください」

ブツンと、唐突にテレビが消えた。

黒い画面だけが残っている。

静まりを、ドン、という鋭い落雷のような音が破った。窓の外からだった。みんなが一斉に振り返る。亜紀がさっきまで眺めていた風景。

地鳴りがして、机がガタガタと揺れる。

誰かが叫んだ。慌ただしく廊下をかける音がした。誰からともなく逃げ出す。教室の扉に人があふれる。声と混乱と恐怖が満ちる。

亜紀は訳も分からずに、教室から飛び出した。廊下は人混みだった。皆が押し合い、我先にと駆けている。

誰かが転んだ。亜紀は反射的にそちらに気を取られる。反対側から強くぶつかられて、亜紀も倒れた。

人に踏みつけられた。人の足しか見えない。起きあがれない。

必死で体を起こそうと置いた手の平を、上履きに踏みつけられる。

「高原」と書かれていた。足にもまれながら、まさかと顔を上げる。紗智子の姿だった。見向きもせず人に紛れて走り去って行った。

ドドンと、さっきよりも大きく音がして激しく床が揺れた。した。

呆然と紗智子の後ろ姿に目を奪われていた亜紀は、振動に抗えずに廊下を転がった。鈍い音がして、そこで記憶がとぎれた。



## 2・廊下の生徒たち

ゆっくりと、目を開く。まぶたが重い。

しばらくしてやっと、亜紀は自分が床に倒れていることに気づいた。

・どうなったんだろう。何してたんだっけ。

ぼんやりと考えながら、上半身を起こす。

・あたし、転がって気絶してたのか。

さっきまでの混乱が嘘のように、あたりは静寂そのものだった。静けさが耳につんと来る。

頭をさすろうと、手をやる。幸い、血は出ていないようだった。代わりに、軽くふれた一力所に激痛が走り、うっと呻いて顔をしかめた。大きなこぶになっているようだった。

辺りを見回すと、大きめの地震の後のような光景だった。廊下にあった物が、倒れたり散らばったりしている。

そして誰もいない。皆、逃げていったのだ。自分が逃げ遅れたことに気づいて、不安がこみ上げてきた。

あたしも早く逃げなくちゃ、そう思った一瞬、頭が真っ白になる。

・逃げるって、どこへ？ みんなどこへ逃げたの？

こみ上げてきていた不安が爆発しそうになって、泣きそうになる。

・私たち、何から逃げてるの？

何が起こっているのか、全く分からない。本当にこれは、現実だろ

うか。床にへたり込んだまま、亜紀は呆然と空を見つめた。

床に何かがきらりと光った。どこから飛んできた鏡の破片が、散らばっていた。亜紀は鏡の破片をのぞき込む。

いつもの自分の顔だった。同じ髪に肌、目も鼻も口もいつも通り。

朝、洗面所で見えた顔と同じ顔が映っていた。

だが、状況は朝とは明らかにずれている。

亜紀はゆっくりと立ち上がった。今から何をすればいいのか、それを冷静に考えようと顔をこわばらせる。だがまともな考えは何も浮かんでこない。それどころか、頭の働かせ方を忘れてしまっているかのようだった。

・お母さん

小さく呟く。母親の顔が、ちらちらと頭に浮かんだ。母親は、無事だろうか。無性に家に帰りたくなった。

だが実際、今の時間母親は仕事に行っているの、家に帰っても居ないはずで、母親の勤め先に行くには、電車を乗り継いで行かなければならない。

「あんだ、大丈夫？」

突然、背後から声がした。

ビクッとして振り向く。

一人、女生徒がゆっくりとこちらに近づいて来ていた。

「どっか怪我したの？」

セーラー服に不釣り合いな、色の抜けた髪をしたその女性徒は、亜紀の所まで来ると心配そうに顔をのぞき込んだ。

「あなたも、逃げ遅れたの？」

少し安堵したように、亜紀は尋ねた。よかった、一人じゃなかった。

「まあね。まあ逃げ遅れたって言うか、逃げなかったんだよ」

そう言いながら彼女は、ボーイッシュな短い髪を掻いた。耳のピアスが光った。

「あたし、一ノ瀬千鶴。あんたは？」

「あたしは坂下亜紀。逃げなかったって、どういうこと？」

「だって、どこ行けばいいか分からないし。第一状況がよく掴めなかったんで、下手に動かない方が良さかなと思って。みんな、気が狂ったみたいに逃げてたけどね。」

一ノ瀬千鶴はそう言って少し肩をすくめると、ふうと浅く息を漏らした。

亜紀から見ると、彼女はひどく落ち着いて見えた。普通に登校してきて、昨日のあの番組見た、と尋ねる同級生の仕草や声と何も変わらない。

「テレビの声、聞いた？」

千鶴は声を低めて、今度は少し深刻そうに聞いてきた。

「うん。映像も見た。」

「あれ、本当だと思う？」

「あれって・・・」

「『新世界歴1651年から来た、人類の子孫』とかいうの」

亜紀は、テレビから流れてきた声を思い出した。そう、あの声は確

かにそう言った。

あの声が、まざまざと耳元に焼き付いている。

「分からない。何がどうなってるのか、全然分からない」

千鶴の質問に答えると言うよりは、独り言を言うように言って、亜紀は顔をしかめた。

「誰？」

か細い声がした。亜紀と千鶴は、一斉に声のした方を振り向く。見ると不安に満ちた青白い顔で、女生徒が立っていた。壁から半身を覗かせて、警戒している風だった。

「ねえ、何がどうなってるの？地震でも起きたの？」

全く混乱しきった顔で、彼女は尋ねた。声が少し震えている。

「地震？あんた、テレビの声聞かなかったの？」

千鶴は彼女の方に向かいながら言った。

「テレビの声？知らない。」

亜紀は千鶴について、怯えた女性徒の方へと近づく。

「私、具合が悪くて保健室で寝てて、いきなり大きな音がして、保健室が揺れだして、恐くて保健室から出られなかったの。やっと出てきたら、誰もいなくて、周りがこんなになってたから。ねえ、何起きたの？」

そこまで一気に話すと、彼女の目は涙目になってきていた。

かなり可愛らしい顔をしていた。肩ぐらいまでの焦げ茶のかみが、ふわふわと巻かれている。

千鶴は、淡々と何が起こったか、彼女の知っている限りで答えていった。女性徒は何も聞き返すこともなく、千鶴の話に聞き入っていた。亜紀はしばしば、千鶴が省いたことや言い忘れたことを、補足して説明した。

千鶴が話し終わると、彼女は小さく、どおすればいいの、と呟いた。

「さあね、あたしたちもそれが分かんなくて途方に暮れてたってわけ。そのテレビの声もよく意味が分からないし、今何がどうなってるかもさっぱりだから」

女性徒の顔はまだ混乱に満ちている。今度は、勿論何が起こったかもよく分からない上に、何をすべきかさえも全く見当が付かなくて二重に混乱していた。

「ところであたし、一ノ瀬千鶴。こっちはえーと、坂下亜紀。あたしたちも、さつき出会ったばかりなんだよ。あんた、名前は？」

初めて、まともに分かることが話題になって、彼女は顔を上げた。

「宮野ユリカ」

小さな声でそう答えた。

「ユリカ、亜紀、で、これからどうするの？」

唐突に答えの分からないことが分かり切っていることを、千鶴は聞

いてきた。ユリカは答えを求めるように亜紀の方を向いた。だが亜紀にも答えは見つかっていない。

「あたしさ一回、外見てくるよ」

千鶴はあっさりと言った。亜紀は驚いて千鶴を見つめる。

「外に行くの？大丈夫？」

「分かんない。でもさ、何が起こってるのかが分かんないんじゃない、どうにもならないし。」

何が起こっているのか知ろうとして、取り返しの付かないことになったら。亜紀はさきほど見せられた、アメリカの映像を思い出した。必死で逃げる人、それを追いかける武装したような集団。外は今、あれと同じ状況かもしれない。

だが学校にいても安全とは決して言えなかった。いつかはここにも学校に隠れている人を捕らえようと、あいつら - 自称・人類の子孫 - が来るかもしれない。

亜紀は今まで、どこに逃げれば良いか分からずに途方に暮れていたが、それが逃げられる場所など無いことを示していることに気づいて、鳥肌が立った。

- 安全な場所なんてないんだ

「あたしは学校に残る」

鳥肌が立った腕を押さえながら、亜紀は強く言った。

「何が起きてるかは分からないけど、危ない橋は渡りたくない。こ

「こにいても、いつかは状況が分かるかもしれない」

「あんたは？」

千鶴はユリカに目を向ける。

「私は・・・」

ユリカは言いよんだ。声がまた震えている。きよろきよろと大きな瞳を動かして、亜紀に視線が定まった。

「私も、ここにいる。外に出るなんて怖い」

恐いから一緒にいてね、亜紀はユリカに目でそう訴えられたように感じた。

「分かった。じゃ、あたし行くね」

千鶴はそう言つて廊下を歩き出した。そしてつと立ち止まって、振り向いた。

「またね」

素早く身を翻して、階段の方へと曲がつて見えなくなった。千鶴の姿が見えなくなって、亜紀も反対の方向に歩き出す。

「どこ行くの？」

ユリカが慌てて付いてくる。しかしその声は、亜紀の耳には届いていなかった。

- 絶対に、逃げ切ってやる

バラバラに溶けていた亜紀の心が、みるみる固まっていくなの自分でも分かった。

- 人類の子孫だかなんだか知らないけど、捕まってたまるか



## 2・廊下の生徒たち（後書き）

読んで下さってありがとうございます。初めてのことなので、手探り状態で書いています。時々訪れて、続きを読んで下されば幸いです。

### 3 少女A / 捕獲完了

何かを踏んづけた気がする。ぐにやりとした感触だった。でも振り返ってなんかいられない。

逃げなきゃ、速く逃げなきゃ。

高原紗智子は人混みにもまれながら、必死で駆ける。

何とも言えない恐怖が、彼女を煽り立て、彼女の足を速めた。

紗智子は自分が何処に向かって逃げているのか、何から逃げているのか、はつきりとは分からなかった。

ただ、あの声、あの映像。

それにあの、直後の落雷のような音と大きくなっていく振動。

そして叫びながら駆ける人々。

ただ事ではないだろうと、感じ取れた。

- 家だ、家に帰らなきゃ

紗智子は本能的に家に向かっていった。学校から歩いて二十分とかからない。

今朝、亜紀とおしゃべりしながら歩いてきた道を、逆方向に走り抜ける。

ふと気づくと、振動がいつの間にか収まっていた。必死で走っていたので、揺れが収まったことに気づかなかったのだ。

- 速く、速く！

心の中で、呪文のようにそう何度も唱える。

学校を出てしばらくすると、ごたごただった人の群れが、徐々に散り散りになっていった。

それでもどこからともなく、大声や悲鳴が聞こえる。だが悠長に聞いているわけにはいかず、耳に届く声を振り切るように走る。

逃げているという自覚と、必死に振り払っている声が合わさって、一層恐怖を掻き立てた。

脇腹が痛い。息が切れて、かなり苦しい。それでも止まるわけにはいかなかった。

だが、大通りに出て一瞬立ち止まってしまった。

さつき見た、たぶんアメリカの悲惨な光景。それがそのまま目の前に広がっていた。

逃げる者と、追う者。

走る者と、捕らえられて倒れる者。

悲鳴と、威嚇の叫び声。

それらの光景が、一瞬でいっぺんに目に飛び込んできて、紗智子は凍りついた。

足が震える。逃げなきゃ、ずっと唱えているその呪文に励まされて足を動かそうと努める。

意志と身体が折り合わずに、足がもつれた。

「その少女、止まりなさい」

後ろから、拡声器のような声が響いた。

私だ。

私に言われているのだ。

紗智子はよろけながら走り出す。

死にものぐるいで走ったつもりだった。だがすぐに左腕を掴まれ、勢い余って掴んだ相手と一緒に倒れ込んだ。

「いやっ、離して！いやあっ！！」

必死にもがいて、泣き叫ぶ。

紗智子を抑えているのは間違いなく、テレビで見た武装した集団と同じ格好をしていた。

ガチャッと、金属の音がした。感触で、手錠だ、と悟る。

混乱と恐怖で胸も頭もいっぱいのはずなのに、紗智子の脳の片隅には、ほんのわずかな冷静な部分があった。

抵抗しながら、いやでもその冷静な部分が頭の中で呟く。

- もうだめだ、私は捕まったんだ。逃げられないんだ

その冷静な部分は残酷にも、混乱と恐怖を混ぜた絶望の色を、くつきりと紗智子に浮かばせた。

「女を一名捕獲、捕獲車をすぐにG地点に回してくれ」

紗智子を力強く抑えたまま、頭上の男が言った。誰かと連絡を取り合っているようだった。

離して。その紗智子の叫びはもう声にならない。身体が、声にすることを諦めてしまったかのようにだった。ただ、泣きじゃくって、地べたの砂利を噛んだ。

大きな車が三台、連結されて速やかに現れた。確かに「車」なのだろうが、いつも見ていた物とは少し違っていた。

男は紗智子を引きずってドアの方へと進む。自動で、ドアが開いた。紗智子は、荷台に積まれる荷物のように、そこに放り込まれる。

後ろで、ドアの閉まる音がした。

おもり  
錘のような絶望が、心を埋めていく。

涙を流した目で顔を上げると、同じ絶望の錘を背負ったたくさんの

人々が居た。

ある者は顔を埋めて、ある者は声を出して泣いて、またある者は紗智子をじっと見つめていた。同じ学校の制服を着た者が、所々に見える。

何が起こったのかは、未だに分からない。

なぜ自分が荷物のように詰められて、車のような物に乗せられているのかも分からない。

ただ分かるのは、昨日まで繰り返していた日常が、明日には訪れないということだけ。

「12号車、満員のためこれから捕獲施設へ向かう」

車の中で、スピーカーから男の声が響いた。

#### 4・『サカシタ・アキ』

一枚扉を隔てた向こうの廊下では、騒々しく人が行ったり来たりしているのが聞こえる。

完全に、状況に対して報告が間に合っていなかった。だがそれは逆に、計画が、計画以上に順調に進んでいることを示していた。

だだっ広い、全体的に黒い色調のその部屋で、一人の男が大きな机に向かっていた。

机の周りには、コンピューター画面のような物が5、6個、宙に浮かんでいて、それぞれが目まぐるしく画面をくるくると表示している。男の周辺には、薄ぺっらい長方形のコンピューターのキーボードのような物が、3つ浮かんでいた。

画面のうちの 하나가、何度か点滅して、「報告します」という女性の機械音が鳴った。

その音は、淡々と色々な数字を並べて報告を進行していく。

最後に短く「報告完了です」と言った。

男は、その音と同時にキーボードの一つに何かを素早く打ち込む。男が何か打ち込む度に、ピロピロと変な音がしている。

「ジゼリア総帥」

部屋のスピーカーから、彼を呼ぶ声が響いた。

「なんだ」

ジゼリアと呼ばれたその男は、作業を続けながら応える。

「関東地区、第8-Z区の報告がまとまりました」

「入れ」

男の机の対局にある、天井まで届くほどの高いドアが、ウィンと開く。

小柄な男が、コツコツと靴を鳴らして入ってきた。ジゼリア総帥はキーボードを打つ手を止める。

机の所まで来ると男は、手に持っていた、小さなスティック状の機器を壁に向けた。

男がスイッチを押すと、瞬時に壁に立体映像が現れる。

地図とグラフが交互に映り、さっきと同じ機械的な女の声が話し始めた。

「関東地区、第8―Z区の捕獲は約七割方完了。未捕獲推定人数、74名」

「七割か。少し遅れているな」

ジゼリア総帥が言った。

総帥と呼ばれる男は、かなり若く見える。二十歳半ばか、それくらいだろう。

銀に近い、色の薄い髪は、肩ぐらいでこざっぱりと整えられている。国籍のよく分からないような顔は、端正で整っており、上品さと知的な印象を兼ね備えていた。

一方の小柄な男は、外見は四十代で、黒い髪は少し生え際が後退しており、口の周りにひげをたくわえている。明らかに、総帥と呼ばれる上司の男が年下で、指揮官と呼ばれる年配の男が部下だった。

「ヒル指揮官、第5から9区の捕獲の指揮は任せる。明日の正午までに遅れを取り戻せ」

「了解しました」

ヒル指揮官は小さく敬礼して壁に映像を映していた機器のスイッチを切った。

「関東地区第8―Z区には、『サカシタ・アキ』がいたはずだ。捕獲は完了したのか。」

ジゼリア総帥は、中断した作業に戻る。

「申し訳ありません、未だ完了しておりません」

ジゼリア総帥はまた作業を中断し、ついと顔を上げた。

「まだだと？」

淡々としていた、色のない口調がきつくなり、空気が冷たくなる。

「恐らくはどこかに隠れているものと。今、捕獲班は逃亡者の追跡と捕獲施設への輸送で手一杯の状況で―」

「だからどうしたというんだ」

ジゼリア総帥は、獲物をねらう獣のような目でヒル指揮官を睨みつける。

「『サカシタ・アキ』は必ず、生きて捕獲しろ。これも明日の正午



までだ。通信システムを使ってもう一度呼びかける。」

哀れなヒル指揮官は、小柄な身体を一層小さくしたようにして、はい、と小さく呟いた。

そして一礼して、去って行った。

ヒル指揮官が退室してしばらくしてから、ジゼリア総帥はキーボードの手を止め、右下に広がっているもう一方のキーボードのボタンを一つ押した。

新たなコンピューター画面が浮かび上がる。

画面には『S a k a s i t a ・ A k i / サカシタ・アキ』という文字と、その横に黒髪の日本人の女の写真が写っていた。

彼らが探している、坂下亜紀の写真だった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2379c/>

---

ブリーディング=マシン

2010年12月19日11時23分発行